

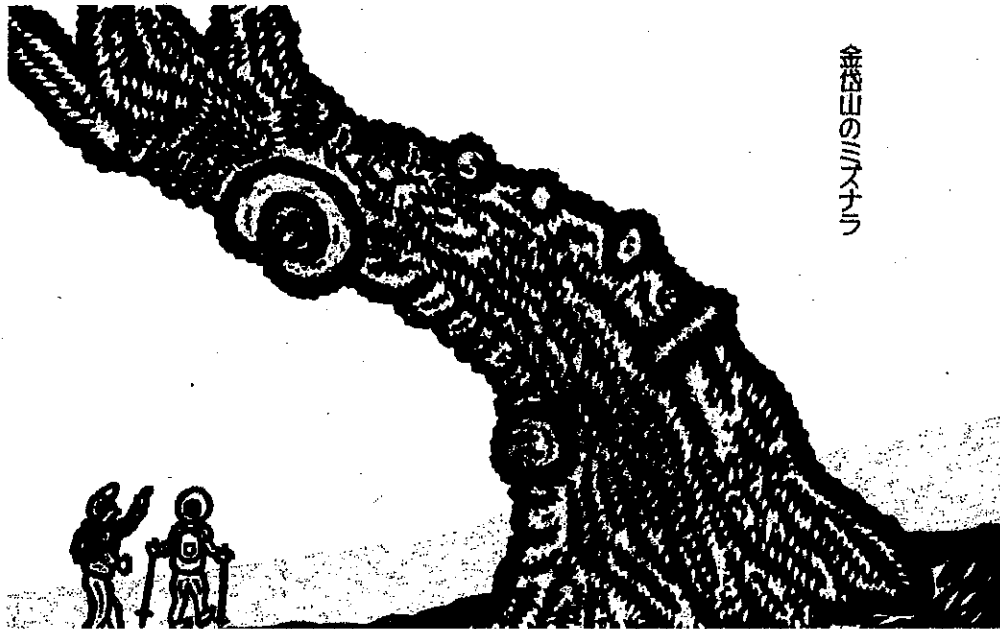
奥多摩の森



奥多摩

《第18号》

平成22年7月15日
奥多摩観光協会



金岱山のミズナラ

木版画 安藤修一

～ 季節 だより ～

巨樹を育む森 (金岱山のミズナラ)

奥多摩町は、全国の市町村の中では、確認された巨樹の本数が日本一多い町と言われています。なぜ日本一となるほどの巨樹を調査したのか、それは、奥多摩町とその関係者が、奥多摩の素晴らしい自然の保護を目的に、巨樹とそれを育む森にしっかりと眼を向けてきたからなのでしょう。

その数え上げた奥多摩の巨樹の中で、私が最も好きな巨樹が、日原金岱山のミズナラ（幹回り7.5m）です。何より、このミズナラは、周辺の見事なブナ林との調和が素晴らしいのです。まず、そのブナ林の素晴らしさの一端を紹介しましょう。

日本のブナ林は、多くの場合、ササを林床に抱えています。雪国ではネマガリタケが、太平洋側ではスズタケがびっしりと生えています。ところが、ここ金岱山ではササが皆無なのです。その理由は不明ですが、これほどの広さでササがない森は、奥深い奥多摩の森においても、それほど多くはないでしょう。ササがないため、自由に歩き回れたり、素晴らしい樹形を根元から観察できたり、

と森を楽しむ上には良いことづくめなのです。

さて、ミズナラに話題を戻しましょう。

このミズナラ、樹形がちょっと変わっています。ほぼ平坦な地形にも関わらず、傾斜地に生える広葉樹のように傾いています。よく観察すると、この傾きは後天性であることに気がきます。

たぶん、数十年前に強風か何かの原因で倒れ掛かったのでしょう。すでに、その頃には、地上6mぐらいまでウロ（木質部が腐って生まれた空洞）が出来ていたことが見て取れます。

このアクシデントにも関わらず、何とか倒れずに踏みとどまったミズナラは、傾きの反対側にあったウロの両側の樹幹を大急ぎで成長させました。板状に育った樹幹部（これをミネと呼ぶ）がダブルの梁の役割を果たし、それ以上傾くことなく現在に至っていると思われます。

このコースは、急峻な取り付け部を過ぎると、なだらかな地形が待っています。ぜひ、この森の素晴らしさを体感してみてください。（堀越弘司）

～ 来 さ っ せ え ～

越沢溪谷の巨樹を訪ねる

コース：古里～越沢～鳩ノ巣

開催日：9月9日(木)

奥多摩町では、今までに幹周り3メートルを超える巨樹1010本が確認されています。今回は、さほど山奥ではないエリアにあるトチノキの大木と植物相豊富な多摩川右岸の越沢(こいざわ)溪谷沿いの道を紹介します。

JR古里駅からのコースは、古くからの共同井戸や地名由来の古里附の滝、石仏などがある旧青梅街道の一部を歩きます。多摩川方面へ下ると寸庭橋があります。橋上から見える下流左岸は、奥多摩産の木材を筏に組んだ土場があった所です。寸庭橋を渡り、多摩川沿いに人工林の中を歩くと間もなく越沢と多摩川の合流点。このあたりには、東京ではめずらしいニッコウキスゲが自生しています。越沢に架かる無名橋付近に思わずシャッターを切りたくなるような小滝が二つあります。仮に越沢の雄滝と雌滝と名づけておきますが、マイナスイオン満点の滝で小休止。越沢が忍沢でないのが惜しまれます。溪流

沿いの道は、タマアジサイやリョウメンシダ、ジュウモンジシダ等のシダ類が目につき、日差しが強い季節には木陰を歩くので紫外線カットのお薦めコースです。

ほたる橋で越沢を渡るとしばらくの間は上り道。樹林下の野草たちが目を楽ませてくれるので意外と早く尾根道に出ます。しばらく御岳山方向へ歩き、バットレスキャンプ場へ向かいます。

沢沿いの道を溯り、樹林地に取り付き、足場の悪い木々の間をかき分けること10分弱で目指すトチノキの下に出ます。見る人を圧倒する大木です。急斜面にあるため幹周りの測定は困難ですが、胸高で5mほど。地上5m付近の最大部分は8m以上ありそうです。森の中に人知れず、ひっそりと佇む越沢のトチノキ。かつては、地元のごく一部の人にとって柄の実拾いの穴場だったのかもしれませんが、今は、拾う人もなく森の動物たちが命をつなく食糧庫。

帰り道は、岩登りのメッカ・越沢バットレスの下を通り丸太橋や人数制限のある吊橋など、スリル万点のコースを経て鳩ノ巣駅へ向かいます。(岡崎 学)

～ 行 っ て 来 た ん だ ～

倉沢谷と倉沢の檜を訪ねて

倉沢谷、あまりなじみの無い……、いえいえ最高の倉沢谷の滝を歩きたいと思い、出発しました。

奥多摩駅より日原鍾乳洞行のバスにゆられて約20分、奥多摩の森は深く、山々はきびしく、でもなんだかやさしい風を感じながら、目的地の倉沢バス停車。

深緑につつまれた倉沢谷は、いくつかの滝をながめ、いくつかの沢の水の音を聞き、今は閉鎖された倉沢鍾乳洞を横に感じながら、目的地・魚留橋に着きました。このまま直進すると、ソバツブ山に行くことができます。楓が多い道で、新緑の芽吹き、春、真夏の木陰の風、紅葉の秋と様々な姿が想像でき、楽しく歩きました。

途中、戦後の石灰採掘が盛んだった頃の集落跡に立ち、しばしの感傷にひたり、栄枯盛衰の機変わりをつくづく感じました。その帰途、倉沢の檜巨樹を訪ねました(ヒノキの生命力をいっぱいいただいて…)。新企画のコース、倉沢谷と倉沢の檜、

そして涼しげに流れ落ちる数々の滝。充分に楽しい奥多摩の自然の大きさを感じました。

自然の大きなめぐみを感じてリフレッシュしてはいかがですか？

みんな！みんな！奥多摩に来させえ！

(花井いつ美)

倉沢の大檜は、昭和30年代に発行されていた「森林家必携」という専門書では、日本一とされていました。その後、高知県でより大きなヒノキが発見され、1位の座を明け渡していました。

今回、「もしかして1位返り咲きも？」と、日原森林館に尋ねてみました。当時1位に立ったヒノキは枯れていましたが、その後発見された巨樹が多く、今の倉沢大檜は、ベストテンにも入っていないそうです。でも、やはり一見の価値はある巨樹です。

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その16 ～

「韓国・仁寿峰クライミング」

ゴールデンウィークが終った5月10日から14日までの5日間、私は韓国の仁寿峰（インスポン）へ岩登りに行って来た。メンバーは友人で山岳ガイドの安村淳さん。安村さんはヒマラヤの8000m峰までガイドするスゴ腕の登山家だ。同じく山岳情報誌「岳人」編集者の山本修二さん。それに当署山岳救助隊若手隊員である佐藤佑紀と私の4人である。

韓国の首都ソウル市郊外に位置する北漢山（ブカンサン）国立公園内にある、白雲台（ペグンデー）、仁寿峰、萬景台（マンギョンデー）の3峰は隣接して聳えるので三角山などとも呼ばれ、いずれも標高800mほどの花崗岩の山である。

標高は低いがドッコイ手強い岩山で、古くからミニヨセミテなどと呼ばれるほど、ロッククライミングのメッカなのである。中でも最大のスケールの山が仁寿峰だ。ソウルの中心部から岩場の取り付きまで2時間弱というアプローチの良さは、東京で言えば高尾山か御岳山ほどのところで一級のクライミングができることから、常に多くのクライマーで賑わっている。

昨年夏ころ、安村さんから仁寿峰に行かないかと誘われ、トントン拍子にメンバー4人が決まり、これまで毎月国内の岩場で練習を重ねてきた。安村さんは、毎年ガイドなどで20年以上も仁寿峰に足を運び、その魅力を山岳情報誌などで日本にも紹介し続けている。

さてソウルに入った私たち4人は、三角山の麓に建つ山小屋、白雲山荘（ペグンサンジャン）をベースにして、丸2日間岩登りをして過ごした。比較的やさしいアルパイン的要素のあるリッジクライミングと、スラブとクラックのフリーマルチピッチであるクラシックルートを登り、充実した登攀を楽しむことができた。

楽しめたといっても、2日目の仁寿峰東面クラシックルートでは、シュイナードBとインスAという2ルートを登り、大スラブ2ピッチを含めると12ピッチにおよび、10時間も行動したため腕力は消耗し、指の皮膚は指紋が消えるほど磨りへった。また壁の傾斜がきつくプロテクションが遠いため、フリークライミングをやっていない私には、相当に厳しい刺激的な1日であった。

3つの山頂に立つことができたが、どの山頂からも眼下にソウルの街が一望できる。ソウルの街

は、まるでドミノ倒しのようにマンションなどのビルが林立し、四方が花崗岩の山に囲まれた盆地だ。その山のいたるところがクライミングの対象になっており、韓国の若者がクライミングのうまいのも頷ける。

白雲山荘主人の李さんは、日本語が堪能で安村さんとも親しい。韓国の登山者は日帰りが可能なため、宿泊客のほとんどが日本人だという。私たちが泊まったときも、他には日本人山岳ガイドで知人の広瀬さんたちだけであった。

韓国の登山人口は2000万人と言われているそう。総人口が5000万人だから、国民の5人に2人は山を楽しんでいることになる。

韓国には「野遊び」という習慣があるという。休みには弁当を持って野や山に出かけ、野外での飲食を楽しむというものである。わたしたちはリッジを登って昼ころ白雲台の山頂に着いたのだが、山頂まで反対側にハイキングコースが整備されており、花崗岩の広い山頂はハイカーで溢れていた。若いも若きも、いたるところで弁当を広げているのだ。切れ落ちた崖の上で食べている人たちもいる。さらに驚くことは韓国のどぶろくと言われる「マッコリ」で乾杯しているのだ。これでは山の事故が多いと言われている事情もよく分かる。麓にはソウル市警の山岳救助隊員8人が24時間態勢で常駐している。

平日だというのに、ハイキングコースも人で溢れている。日本のように中高年も多いが、若い人もずいぶんいる。この人たちは何の仕事をしているんだろうと首を傾げたくなる。休日には登山道が渋滞するそうである。

夜トイレに起きたら、ヘッドランプを点けて登って行く登山者をずいぶんと見かけた。韓国では夜に登る人も珍しくはないのだという。日本でも昔、カモシカ山行などといって夜間に歩き回る登山訓練方法もあったが、今ではそんなことをする人もいない。

最終日、ソウル市内で韓国の登山情報誌、月刊「山」の編集者たちと、チゲ鍋を囲み焼酎（ソウジユ）を酌み交わし交流もできたし、韓国登山事情もおぼろげに飲み込めた。実りの多かった韓国・仁寿峰クライミングであった。

2日後にガイドする客を待つため残留する安村さんと別れ、私たち3人は晴天の続いた金浦空港を後にしたのだった。

「歩けなくなった。救助たのむ」

さてさて、日本の登山事情はどうであろう。ここ2、3年、若者の登山者が目に見えて増えてきた。タイツの上に山スカ（山スカート）を穿いたおしゃれな若い女性が目立つのだ。

日本の山から若者が消え、山は中高年王国となって久しいが、それがこのところ徐々に若者の姿が山に戻って来たのだ。うれしいことである。これはミシュランの高尾山や、プームの富士登山なども関係しているだろうが、山と溪谷社などが穂高の湊沢で開催している「湊沢フェスティバル」の影響も大きいと聞く。

ただ山は非日常の世界である。観光の延長で気軽に思い付きで登ってもらっても困るのだ。

今年になって奥多摩周辺の山で3名が死亡した。何とこの3名はいずれも病気遭難である。ろくに運動もしていない体で山に入る。心臓に急激な負荷がかかる。登っている最中に崩れるように倒れたという事故であった。全国的にも病気遭難は急増中だ。もちろんほとんどが中高年登山者だが、特に高齢者が多い。

ゴールデンウィークの5月3日午後3時40分ころ、御岳ビジターセンター所長の片柳さんから、奥多摩交番に在所していた私の所に電話が入った。「御岳山から大岳山に登り、鋸山を経由して氷川に下山中のMさんという男性が、鋸尾根上で歩けなくなり、ケータイで御岳ビジターセンターに救助要請の依頼があった」というものである。

私は男性の携帯電話の番号を聞き取りブッシュしてみた。男性が出た。「こちら青梅警察署の山岳救助隊ですが、どうしました」と聞くと男性は「今、鋸山から鋸尾根を下山中なのですが、歩けなくなりました。救助をお願いできませんでしょうか」と言う。「今どの辺りですか。ケガでもしたのですか」と聞いたら「鋸山頂から40分くらい下りたところです。ケガはしていませんが、足が痛くて倒れそうになり、歩けないのです」と言う。まだ鉄梯子、鎖場まで来ていないというから、ちょうど鋸尾根の中間地点辺りかもしれない。心臓疾患や脳障害などだったら、岩尾根である鋸尾根の下山は危険が伴う。直ちに救助に向うことにした。

奥多摩消防署にも連絡を入れ、山岳救助隊を招集した。現場へは、鋸林道を大ダツまで車で上り鋸尾根を下ってくるか、それとも鋸尾根の末端から登り上げるか迷ったが、車で行き鋸林道が上部で大きく鋸尾根に近づいたカーブから、直接鋸尾根に登り上げた方が一番早いと判断し、高田副隊

長以下5名で出動した。

大きなカーブに車を止め、鋸尾根を目指して登る。当然踏み跡などはない急斜面だ。勘を頼りに高みを目指す。息を切らせ20分ほど登ると鋸尾根の登山道に飛び出した。

遭難者はまだ下の方だと勘を働かせ、鋸尾根を走るように下った。Mさんの名前を連呼しながら尾根を下る。最初の鉄階段の所まできたら前方のピークで手を振っている遭難者を発見した。急いで下り、そしてピークに登り上げると遭難者Mさん(61歳)に接触した。ちょうど下から登ってきた消防の小林中隊長も到着したところだった。消防はヘリを飛ばし、天聖山から吊り上げるという。

Mさんは心臓などの障害はないが、ただ疲れて歩くことができなくなったのだという。全く情けない救助要請である。ケガはないのだから、岩尾根を担架などで運ぶより背負ったほうが早い。私は持ってきた背負い具(キャリングラック)を出し、備置隊員にセットさせた。Mさんの体重は68キロだという。

上空には消防庁のヘリが飛んで来ている。消防は天聖山の方でヘリ吊り上げの準備をすとい現場を離れた。岩場なので私が背負うことにした。後ろから渡辺隊員がザイルで確保し、ストックでバランスを取りながら背負った。重い。ゆっくり慎重に歩く。よく転落事故のあるギャップの鉄梯子も慎重に下りると天聖山への登りである。今度は鉄梯子を登る。下から備置隊員が押し上げる。顔からダラダラと汗が噴き出る。20分ほど背負い尾根筋の開けた天聖山ピークに登り上げた。すかさずヘリが進入して来た。天聖山からは過去にも何度かピックアップしている。ホバリングしたヘリにMさんは吊り上げられ、そのまま青梅市立総合病院に搬送された。

ケガなど無いのだから、医者だって何の治療も施しようがないだろう。体力不足で歩けなくなり救助要請。負ぶさって移動。そしてヘリで病院に搬送。大名旅行ではないのだ。釈然としない救出劇だった。御岳山、大岳山、鋸山のコースなど、そんなハードなコースではない。この登山者としての自覚やプライドの無さ。自身の体力や登山に対する無知。このような情けない救助要請はこれからも続くことが懸念される。

今年のゴールデンウィークに救助要請のあった2件は、いずれも「足が痛くて歩けなくなった」であった。嗚呼。

(青梅警察署囑託員 山岳指導員 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(18)

境の小字「さかい」には、鎮守白髭神社が祀られています。社地は青梅街道の旧道(むかし道)沿いにあり、神社の山側には、東京都天然記念物「白髭の大岩」が社殿に覆いかぶさるように屹立し、いかにも神の窟(くら)に相応しい岩容をしています。境は、おしなべて大岩の多い地域です。さかいの対岸の「大や下」には、山腹にある二つの大岩が、多摩川をのぞくように立っていますが、大や下の地名は、この大岩が元となっているようです。地名が付けられた古い時代には、岩のことをイヤと発音していましたので、大岩(オオイヤ)が、オオヤ(大ヤ)と変わっていったのではないかと思います。白丸から氷川へ山越えする根岩越えも「ネイヤゴエ」と言っていました。

「しだくら」のくらは、「神窟(かんのくら)」「倉沢」「がんくら」などと同じ岩の意で、シダの生い茂る岩場のことです。ここにも割岩と呼ばれる大岩があります。むかしは、一つの岩でしたが、いつの頃から二つに分かれたものだといえます。しだくら橋か

ら下流の惣岳溪谷は、かつて巨石が累々と川をふさぐ中を、多摩川が奔流となって流れ下る「惣岳のあら(荒)」として知られていました。木材流送の盛んな頃は、難所の一つとして「木やり唄」にも唄われている場所です。

「むかし、大暴風雨の晩、しだくら谷の谷底から大音響とともに大蛇が姿を現し、その晩の内に大量の土砂や巨岩を押し出しながら、多摩川の惣岳河原へなだれこんでいきました。惣岳河原は、一夜にして大きな岩がところせましと転がり、瀬には、荒波が立つ惣岳の荒(あら)が出現したのです。そしてここには、大うずが巻く淵ができて、大蛇の棲家となりました。上流から管流し(1本ながし)で来た木材がみな荒の淵でつかえて、水根沢辺りまで川いっばいに詰まってしまうので、それからは、ひょう(流送人夫)たちも大蛇の棲むうずの巻く淵を恐れて、木材を流しこまないように気をつけ、水神様を祀って木材流しの安全を祈ったということです。」

【資料】 奥多摩町誌、広報おくたま、西多摩郡村誌、奥多摩むかしみちの昔話

(岡部義重)

奥多摩歳時記

涼を求めて滝を訪ねる

厳しい暑さの続くこの時季、緑陰に苔むした滝を求めて奥多摩を訪ねるハイカーは多い。大多摩地域の滝といえば小菅村の白糸の滝(36m)、桧原村のセド沢にかかる払沢の滝(最下段26m)、そして当奥多摩町川苔谷の百尋の滝(40m)が有名である。それぞれ趣を異にし、繊細な白糸や夏ライトアップされる払沢、雄大な百尋といずれも個性的である。

これらの名瀑は本誌の読者なら一度といわず二度三度いやそれ以上訪れていると思われる。ここでは奥多摩観光協会が推奨する涼風の海沢三滝を取り挙げたい。

JR青梅線の終着駅奥多摩が、ひとつ手前の白丸で下車し、両者の中間に位置する氷川発電所から林道を散策すること約1時間、すっかり森林浴が出来たところで海沢園地到着である。

ここから沢沿いの小路を進むと、突如現れるのが深い滝つぼを持つ三ツ釜の滝(写真)である。

沢沿いに付けられた探勝路を、園地から約30分でネジシの滝と大滝があり、探勝後は来た道を園地迄引き返す。あとはもと来た林道を引き返すもよし、大樹峠を経由し約1時間半で鳩ノ巣駅に出ても良い。

詳細は、当協会の観光ガイドの案内を聴きながらのお楽しみ。



(注)…沢沿いの道は滑りやすく危険を伴う。単独行は自置し経験者と同行されたい。なお、もっぱら遊行をする方は「奥多摩の山と谷」(山と溪谷社刊)などを参照されたい。

(富士光男)

ガイドだより ～新米ガイドの夢～

退職を契機に全く門外漢であった樹木・野草・動物の世界へ入りました。ガイド研修で講師の方が「これはアブラチャン、あれはタカノツメ」と60数年の人生で初めて聞いた名前ばかり…。

1年半の間、先輩ガイド諸氏から学んだことは、まず樹木・野草・動物等自然を好きになること、好きになるためには疑問を持って調べ、実際に五感で確認してみると、いやがうえにもその動植物に愛着を持つようになる、ということでした。経験も知識もない者だからこそ湧いてくる素朴な疑問を人に尋ね、自分で調べたことを下記にいくつかまとめ、奥多摩の豊かな自然の一端をご紹介します。

① 奥多摩の山々と渓谷ができたのはいつ？

山の斜面の岩石には恐竜のいたジュラ紀およそ2億年前の岩石が混ざっているとのこと。当時はまだ日本列島（日本列島がほぼ今の形になったのは1500万年前）はなく、はるか赤道付近の南の海に浮かぶ陸地や海底がこの場所まで移動し、その後隆起して高原状の高まりが生まれ、水・風等の浸食で谷が刻まれ、ほぼ数十万年前に今のような地形になったそうです。慌ただしい日常では想像もつかない悠久な時の流れに身を置き、その遙かな時間に想いを巡らす時、奥多摩はまた違った魅力を見せます。

② 木々の生き残り作戦？虫や菌の役割？

先輩の針葉樹は3億年前、後輩の広葉樹は2億年前に生まれ、水や養分の多い所は後輩の広葉樹。尾根の乾燥地は先輩の針葉樹。イチヨウやカツラ、ホオノキは古代の姿そのままの木。高い木の一部は生き残りをかけて低い木へと姿を変え、仲良く住み分けて暮らしています。そして無数の虫や菌が落葉や倒木を分解して土壌の養分をつくり、その養分を樹木・野草が成長の糧とする絶妙な循環が森にはあります。

③ 樹木が数億年、命をつないできた方法は？

種が風に吹かれ、水に流され、鳥に食べられて糞として落ち、昆虫に運ばれ、動物に付着し、時に地中で眠り、それぞれの生きる世界を旅してきました。

④ カタクリは「生きた化石」？

カタクリは数万年前の氷河期からの「生きた化石」。1万年前に氷河期が終わり、涼しい場所に逃げなくてはなりません。雪国、高い山、低地の北斜面にかろうじて生きています。

動植物の名前はもとより、広く生物の不思議な生きる知恵を皆さんと一緒に考え、感動を共有し、楽しく案内できることが新米ガイドの夢です。

(湊 修一)

施設案内

山のふるさと村

コーヒー・軽食『やませみ』

山のふるさと村は、都民から「山ふる」の愛称で親しまれている自然公園です。

その中にレストラン「やませみ」があります。特に奥多摩やまめを使用した『奥多摩ヤマメフライ定食』（950円）をお薦めします。食欲をそそります。

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、初夏から秋に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号（2名様まで）を明記の上、奥多摩観光協会へ。（抽選の場合あり）

- ① 8月4日(水) 丹三郎からレンゲシヨウマを訪ねる
応募締切日 7月18日(登山)
- ② 8月17日(火) 夏休み親子体験教室
釣り・カヌー体験(別料金)
応募締切日 8月4日
- ③ 8月18日(水) 夏休み親子体験教室
釣り・カヌー体験(別料金)
応募締切日 8月4日
- ④ 8月26日(木) 倉沢の檜と滝を楽しむ
応募締切日 8月15日(ハイキング)
- ⑤ 9月9日(木) 越沢渓谷の巨樹を訪ねる
応募締切日 8月20日(ハイキング)
- ⑥ 9月24日(金) 白丸叢策と川合玉堂の足跡を訪ねる
応募締切日 9月10日(ハイキング)
- ⑦ 10月5日(火) 関東ふれあいの道
棒の折山・名坂峠・北川橋
応募締切日 9月20日(登山)

募集人員：各回30名、参加費：500円

次号は、平成22年10月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会